

足立区ギャラクシティ運営評価委員会議事録

会 議 名	足立区ギャラクシティ運営評価委員会		
事 務 局	地域文化課 課長 江連 嘉人 係長 小栗 洋平 係員 鈴江 和俊 係員 村田 貴紀 係員 高橋 勇人	住区推進課 係長 熊谷 洋子	
開催年月日	令和7年12月23日（火）		
開催時間	午後2時 ～ 午後4時		
開催場所	ギャラクシティ レクリエーションホール1		
出席者	渡辺 千歳 委員 (東京未来大学 こども心理学部教授)	山縣 朋彦 委員 (文教大学教育学部 学校教育課程 教授)	伊志嶺 絵里子 委員 (東京藝術大学音楽学部 非常勤講師)
	酒井 雅男 委員 (銀座ヒラソル法律事務所 弁護士)	工藤 隆朗 委員 (足立区立小学校PTA 連合会副会長)	四宮 淳司 委員 (足立区少年団体連合協 議会会長)
欠席者	なし		
会議次第	1 開会 2 課長挨拶 3 委員照会 4 委員長、副委員長選出 5 事務局説明 6 指定管理者ヒアリング 7 意見交換 8 閉会		
資料	資料1 業務評価チェックシート 資料2 加点提案書一覧 資料3 条例等一式 資料4 令和6年度協定書 資料5 令和6年度各種報告書 資料6 令和6年度広報誌一式 資料7 令和6年度アンケート結果 資料8 業務評価シート		

令和6年度ギャラクシティ評価委員会議事録
1日目

【開会】

<小栗係長>

定刻になりましたので、ただいまより「ギャラクシティ運営評価委員会」1日目を始めさせていただきます。本日はお忙しい中お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。私は広域施設係長の小栗でございます。

本委員会は、足立区こども未来創造館条例第24条及び第25条に基づきまして、区長の附属機関として開催されるものです。なお、本委員会は「足立区ギャラクシティ運営評価委員会公開規程」に基づき、公開会議となっております。この後、傍聴人が入場することもございますので、あらかじめご了承ください。

<小栗係長>

開会に先立ちまして、地域文化課長の江連よりご挨拶申し上げます。

<江連地域文化課長>

皆さんこんにちは。あいにくの雨で本日も少し肌寒い中、お集まりいただき誠にありがとうございます。本日と明日の2日間にわたって評価をいただきますので、よろしくお願いいたします。

ギャラクシティは平成25年にリニューアルオープンし、そこから指定管理者制度を導入いたしました。現在の指定管理者であるみらい創造堂（ヤオキン商事様）は、平成30年度から運営を担っており、今年で8年目となります。

当施設は「こども未来創造館」に加え、「西新井文化ホール」と「子育てサロン」の3つの施

設からなる複合施設です。これら3施設につきまして、評価をいただきたいと思います。

区としましても、民間の発想を活かした指定管理者制度をうまく活用し、PDCAサイクルを回していくことが非常に重要だと考えております。日頃から区の担当部署とギャラクシティ（みらい創造堂）で交流し、意見を出し合いながら運営しておりますが、内々ではどうしても見えなくなってしまうものや、気づきづらくなっている点もあるかと思っております。専門的な知見から、ぜひ忌憚のないご意見をいただければ幸いです。よろしくお願いいたします。

<小栗係長>

続きまして、評価委員の皆様のご紹介をさせていただきます。あわせて、今年度は委員の皆様新たな任期を務めていただくこととなりますので、地域文化課長より委嘱状の交付をさせていただきます。

【委嘱状交付】

<小栗係長>

それでは続きまして、足立区こども未来創造館条例施行規則第18条に基づきまして、本委員会を開催するにあたり、委員長を選任いたします。昨年度に引き続き、渡辺委員にお願いしたいと考えておりますが、皆様いかがでしょうか。

<委員一同>

異議なし（拍手）。

<小栗係長>

ありがとうございます。続きまして、足立区ギャラクシティ運営評価委員会運営要綱第3条に基づきまして、委員長より副委員長をご指名させていただきます。

<渡辺委員長>

副委員長は山縣委員にお願いしたいと思えます。

<山縣副委員長>

よろしくお願ひいたします。

<小栗係長>

それでは、開会に先立ちまして、委員長よりご挨拶を賜りたいと思えます。渡辺委員長、よろしくお願ひいたします。

<渡辺委員長>

はい。ギャラクシティもだいぶ古くなってきたかなというところですが、子どもたちや保護者、区民や区外の皆様が、楽しく安全に、また学び、遊びができる施設であってほしいと思えます。どうぞよろしくお願ひいたします。

<小栗係長>

渡辺委員長、ありがとうございます。それでは、ここからの議事進行は委員長にお願いしたいと思えます。

<渡辺委員長>

はい。ただいまから、令和6年度足立区ギャラクシティの運営に係る第1回運営評価委員会を開会いたします。開催にあたり、事務局から事前説明をお願いします。

<小栗係長>

はい。それでは本日の進行について説明させていただきます。お手元にご置きます次第に沿って、事前にお渡ししている資料、および本日お渡しした資料をもとに進行させていただきます。

まず、審査方法の確認をいたします。審査はチェックシートに沿って行います。チェックシートに記載のある指定管理者自己評価と区のモニタリング評価、そしてヒアリング内容を参考に審議を経て、得点を決定いたします。

なお、昨年度に引き続き、評価項目のうち「管理状況」のチェック項目については、資料の整備状況に基づく客観的な判断が主となり、委員の皆様のご裁量の余地が少ない項目でございます。そのため、区のモニタリング結果を後ほど説明させていただき、皆様に追認いただくという形をとらせていただければと存じます。

また、最後に所見シートをもとに評価シートに記載するコメントを決定いたしますが、こちらは2日目に行う予定です。

本日1日目は、西新井文化ホールの項目のヒアリングまでを予定しておりますので、ご協力のほどよろしくお願ひいたします。2日目には、残りの項目のヒアリング、評価点の決定、およびコメントの決定を行う予定です。

以上、簡単ではございますが、事務局からの説明を終わります。

<渡辺委員長>

はい、ありがとうございます。それでは事務局より、「管理状況」のモニタリング結果の説明をお願いします。

<小栗係長>

はい。それでは、事務局より管理状況のモニタリング結果をご報告させていただきます。お配りしておりますチェックシートに基づきまして、説明をさせていただきます。資料の1ページ目からご覧ください。

こちらの1ページ目、「管理状況」という項目から始まる箇所について、モニタリングした結果を事務局よりご報告いたします。まず、「適切な管理運営の履行」から説明させていただきます。

こちらの適切な管理への取り組みにつきまして、仕様書等の各項目およびギャラクシティからの報告内容を確認いたしました。その結果、区のルールに則り、適正に業務が行われていることを確認しております。

概ねこちらについては問題ございませんでしたが、1項目に×がありましたので、補足いたします。これについては、区民の声が1件あったことに関しまして、委員の皆様の所見シートでも詳細を知りたいというお話をいただいておりますので、説明させていただきます。

こちらの区民の声の内容についてですが、ギャラクシティの総合窓口で施設の部屋利用の受付をしていた際、窓口には職員2名の対応に関するものです。「窓口の前に立っていたにもかかわらず、私語に夢中で気づかなかった。もっと積極的に声掛けをしてもいいのではないか」というご意見と、その後の接客態度についても「施設予約の際、パソコン入力があるため座って対応すること自体は理解できるが、終始座ったまま対応していた」というご意見をいただいたものです。

指定管理者に事実確認をした結果をご報告します。指摘を受けた職員からのヒアリングによりますと、「決して私語をしていたわけではなく、業務の準備の関係で2人で打ち合わせしており、お客様に気づくのが遅れてしまった」と指定管理者は説明しております。

また、座ったままの接客については、システム入力用のデスクの構造上、どうしても座りながら操作する形になっており、1人は立って接客をしていたものの、もう1人が入力のために座っていたという状況で、それが配慮不足としてご意見につながってしまいました。

しかしながら、目の前にお客様がいらっしゃることに気づけなかったという点は大きな問題であると考えております。今後は周囲を常に気かけながら業務を遂行するとともに、スタッフから積極的な声掛けを行うよう、指定管理者内で情報を共有いたしました。また、接客研修を改めて実施し、職員の意識向上に努めることで対応したとの報告を受けております。接客に関する区民の声、ご意見に対する報告については以上でございます。

続いて、資料2ページ目をご覧ください。「職員の勤務状況・体制が適切である」という項目につきましては、勤務ローテーション表や朝礼シートを確認いたしました。

これらは職員間で「今日1日、どのような動きがあるのか」を共有するために作成されており、情報が見える化されたものを配布して、円滑な情報共有が図られていることを確認しております。本項目については、仕様書通りの体制が整っていると判断し、すべて○としております。

なお、加点提案事項については、後ほど指定管理者から説明がございましたので、その際にあわせて補足させていただきます。

続いて、3ページ目の「人材育成への取り組み」についてでございます。人材育成につきましては、現在の指定管理者は非常に積極的に取り組

んでいる印象がございます。令和6年度には、カスタマーハラスメント研修や個人情報保護研修、さらにはインクルーシブ研修など、職員のスキルアップを目的とした多様な研修を数多く実施しています。

これらの実績に基づき、こちらもすべてのチェック項目を○として評価しております。

続いて、資料4ページ目の「安全性の確保」についてでございます。こちらも設備点検等は仕様書通りになされていることを確認しておりますが、(2)の項目に×がついております。

この原因について、非常用発電機設備の動作不良による臨時休館が発生した件を含め、詳細をご説明させていただきます。

令和7年1月18日に1日だけ臨時休館をいたしました。その理由ですが、1月16日から17日にかけて電気設備の定期点検を実施したところ、非常用発電機が正常に作動しない不具合が確認されたためです。

非常用発電機が稼働しない場合、万が一の火災による停電時に、スプリンクラーや避難誘導灯が作動しないこととなります。人命に関わる重大な事態が想定されたため、安全を最優先に考え、急遽、臨時休館を決定いたしました。

1月18日に臨時休館を行い、同日中に原因追究を行ったところ、その日の夜に原因が判明いたしました。昨年12月に実施した法定点検の際、非常用電源設備の試験を行うために一部の配線を外していたのですが、試験終了後にその配線を戻し忘れていたという、指定管理者の委託した保守点検業者によるケアレスミスが原因でした。機器の故障や損傷によるものではございませんでした。

この臨時休館に伴う損害については、区と指定管理者との間で協議が行われ、現在は和解により解決しております。

また、再発防止策として、協定書において点検業務の仕様を改めて見直しました。「点検後には必ず再稼働の確認をすること」や「責任者が必ず立ち会うこと」を明記し、令和7年度の点検からは徹底するようにしております。

以上のような事象がございましたので、「安全性の確保」の(2)については×とさせていただきます。

続いて、5ページ目でございます。「施設・設備の経年劣化に対応している」という項目について説明いたします。

こちらについては、資料に「令和6年度評価加点基準」を付けさせていただいております。施設の経過年数に基づき、メンテナンスの難易度を考慮して点数を加算する仕組みとなっており、今回の加点については、その基準に則って算出しております。

また、点検結果を踏まえて適切な改修・修繕提案を行っているかといったチェック項目がございます。昨年度の委員会や、今回の所見シートでもご意見をいただいております通り、ギャラクシティの経年劣化については各方面から指摘されているところでございます。

大規模改修まであと1年余りとなりましたが、それまでの間、運営に支障が出ないか、あるいは安全性の確保に問題がないかについては、非常に注意深く対応しなければならないと認識しております。定期点検の結果に基づき、指定

管理者と区の間で密に連絡を取り合い、必要に応じて現場の状況を直接確認するなど、細心の注意を払って維持管理に努めております。

こうした点において、指定管理者にも多大な協力をいただいておりますので、今回のモニタリング結果としては〇とさせていただきます。

続いて、「利用者が快適に利用できるよう、施設の管理が適切に行われている」という項目でございます。

こちらにつきましても、アンケート結果の通り、「清潔な施設である」といったポジティブなご意見を多数いただいております。利用者の皆様が快適に利用できるよう、指定管理者の努力が見受けられましたので、こちらの項目も〇とさせていただきます。

続いて、6 ページ目でございます。

こちらにつきましても、地域や利用者を巻き込んだ防災訓練の実施など、指定管理者の危機管理意識は非常に高く、積極的に取り組んでいただいているという認識ではございます。しかし、1 点 (3) の項目に×がついておりますので、その理由を説明させていただきます。

こちらは、昨年度に実施された指定管理者監査において、区の監査委員より指摘を受けたものです。具体的には、消防設備点検の際、「防火扉の前に障害物があるため、速やかに取り除いてください」という指摘がございました。

場所は、スペースアスレチックの中段付近です。火災が発生した際の避難ルートに防火扉があるのですが、新型コロナウイルス流行以降、換気を良くするために設置していた大型扇風機

が、その防火扉を塞ぐ形で置かれていました。

消防設備点検で指摘を受けた際、一旦は取り除いたのですが、その後の管理運営においてスタッフ間の情報共有が不十分でした。事情を知らないスタッフが再び扇風機を元の位置である防火扉前に戻してしまい、次の点検時にもまだ置いたままになっていたという経緯がございます。

消防設備点検で指摘を受けたにもかかわらず、改善がなされていないという点について、監査で厳しい指摘を受ける形となりました。したがって、こちらの項目を×とさせていただきます。

続いて、資料7 ページ目、「法令等の遵守」についてでございます。

こちらは、個人情報の保護への取り組みとして、研修等が適切に実施されていること、また、昨年度において個人情報の漏洩事故等も発生していないことを確認しております。したがって、すべてのチェック項目を〇としております。

次に、8 ページ目の「各種法令等の遵守」に関する項目についてでございます。こちらも特筆すべき問題はございません。職員の皆様が各種法令を遵守し、適切に業務にあたっていることを確認しておりますので、すべて〇とさせていただきます。

先ほど消防法の件で評価が引っかかっているというお話をしましたが、その点については先ほどの項目で評価に反映しておりますので、こちらの項目についてはそれ以外の基準に照らして判断しております。

最後になりますが、9 ページ目の「適切な財務・財産管理」でございます。こちらにつきましては、安定的な経営を行っているかという点において、収支がプラスであること、また、区への施設使用料の納付が適切に行われていることを確認いたしました。したがって、こちらもすべて適切に処理されているということで、チェック項目を○としております。

事務局からの管理状況のモニタリング結果報告については以上です。

<渡辺委員長>

はい、ありがとうございます。それでは続きまして、指定管理者からの報告に移ります。指定管理者に入室していただきます。なお、現時点で傍聴人の方はいらっしゃらないようです。

<渡辺委員長>

それでは、指定管理者のヒアリングを始めさせていただきます。まず指定管理者に事業総括を3分程度行っていただいた後、評価項目ごとに事業説明を行っていただき、その後に質疑応答をさせていただきます。

<村田館長>

皆さんこんにちは。本日はお忙しい中お越しいただきまして誠にありがとうございます。ギャラクシティ館長の村田です。どうぞよろしくお願いたします。

まず昨年度、令和6年度の総括をさせていただきます。昨年度はギャラクシティ創立30周年でした。当初は大規模改修前のラストイヤーという予定でしたので、これまでの歩みを振り返り、感謝の意を込めて年間を通して感謝祭を実施し、締めくくろうという計画でした。しかし、

改修延期が周知の通りとなったため、単なる感謝祭ではなく、改めて周年事業に重きを置いて運営管理をさせていただきました。

運営コンセプトは、もちろん変わることなく一貫しております。ブランドビジョンとして掲げている「わくわくウォ!」、誰一人取り残すことなく、子どもたちの自発的な好奇心や学びの欲求に向き合い、常に挑戦し自己肯定感を高め、生きる力の原動力を実装することができるよう、目がキラキラと輝くような「わくわく」する取り組みを各分野で実施してまいりました。特に、基本方針に掲げておりました「地域との一体化運営」と「共創の推進」を、具現化できた1年だったと考えております。

単にワークショップの講師をお願いする、場所や会場を提供するだけの薄い関係ではなく、長い期間をかけて一緒に意見を出し合い、企画・運営を行う。そうした共助の主体として深く関わっていただき、地域課題の解決や子どもの成長支援を共に進めていくスタイルが出来上がりと感じています。共生社会への理解や共助の精神を育むためのコラボレーション事業を中心に、数多く展開してまいりました。

詳細につきましては、加点提案事項を中心に説明させていただきますが、まずは数字上の実績を簡単にお伝えします。

令和6年度の総来館者数は、1,305,297名でした。令和5年度が1,305,248名でしたので、わずかではありますが、前年比で49名のプラスとなりました。

大きな内訳は以下の4点です。

体験施設は令和6年度が1,016,079名。令和5

年度が1,021,269名でしたので、前年比99%。
人数では5,190名の減少となりました。

貸し室事業は令和6年度が93,751名。令和5年度が89,282名でしたので、こちらは前年比104%。人数では4,469名の増加となりました。

まるちたいけんドームは令和6年度が83,169名。令和5年度が80,996名でしたので、前年比102%。2,173名の増加となりました。

西新井文化ホールは令和6年度が112,298名。令和5年度が113,701名でしたので、前年比99%。人数では1,403名の減少となりました。

これらを合計いたしますと、前年比49名プラスの1,305,297名という実績になりました。

総括に関しては以上となります。

<渡辺委員長>

ありがとうございました。それでは管理状況の
加点提案書についてご説明をお願いします。

<村田館長>

管理部門の加点提案書を中心にお話しさせていただきます。加点提案書は全部で8項目ございますが、お時間の都合もありますので、大きく2点に絞ってお話しします。

まず「1-A-3」、共生社会の実践につながる受け入れ体制の確立についてです。「いつでも、誰もが、何度でも利用できるギャラクシティ事業」を実現するべく、事前に研修を重ねてまいりました。

全国公立文化施設協議会（公文協）のコーディネーターによるインクルーシブ研修では、講義

のみならず、実際に車椅子を使って車椅子ユーザーを想定した実技研修も行い、知識として覚えるだけでなく実践的な対応を学ぶことができました。

参加者は、弊社の職員のみならずレセプション、そして以前より交流のある東京未来大学の学生さんと小谷准教授にもご参加いただいております。学生さんたちは、日常的に障がいをお持ちの方との繋がりを深めており、対応経験が豊富な方も多いと伺っておりましたので、ぜひとお声掛けさせていただきました。

これら研修の成果を、2月に開催した西新井文化ホールでの鑑賞サポート付公演（視覚・聴覚障がい者向け）にて実践いたしました。現状、専用席を設ける鑑賞サポート付公演は全国的に少しずつ増えてはおりますが、実際の利用者はまだ少ないという話を聞いておりました。そこで我々は、足立区の障がい福祉センターに相談し、ろう学校、盲学校、各団体などをご紹介いただき、直接足を運んでご相談させていただきました。その結果、用意した60席の専用席はほぼ満席となりました。

私をはじめ各職員が、各地で実施されているインクルーシブ研修を積極的に受講しており、共生社会への意識と理解が深まりつつあります。これをイベントの一過性で終わらせず、日常の既存事業において、いかにアクセシビリティを向上させられるかを常に考え、年間を通して持続させていきたいと考えております。

続きまして、地域で共助を育む取り組みについてです。加点提案の「1-B-4」にあたる、災害時や救急時における継続的な訓練による安全性の向上を目指した取り組みです。

職員だけが学ぶのではなく、利用者の皆様にも広く体験していただき、一緒に知恵を出して助け合う「共助の精神」を養うことが重要だと考えております。

具体的には、これまで通常年2回、職員中心の避難訓練のみを行ってまいりましたが、昨年度は各大型遊具やまるちたいけんドームにおいて、利用者参加型の避難訓練を実施いたしました。

また、防災月間である9月には、18種類の体験型防災イベントを開催しました。3階の多目的室からは、斜降式救助袋（オリロー）を用いた訓練を行い、近隣の町会や自治会、JKK（東京都住宅供給公社）の皆様との合同訓練を実施しております。救助袋で実際に降りる行程に関しては、安全性を考慮し職員のみでの体験といたしましたが、地域の方々手順を確認することができました。

さらに春には、足立消防署主催の消防演習がギャラクシティ中庭で行われ、ギャラクシティ自衛消防隊として参加させていただきました。当日、私は一日消防署長を務めさせていただき、放水指示や、起震車の乗車体験なども行いました。地域の消防団を含め、約70名の方々にご参加いただいております。

常日頃から避難訓練の際にお伝えしていることですが、いざ有事の際、消防や警察による「公助」は、災害が大きければ大きいほど、すぐには届かないケースがあります。だからこそ、普段から知恵を出し合って助け合う「共助」の心構えを養う機会を、今後も積極的に作っていきたいと考えております。

加点提案に関する説明は、項目を絞らせていた

だきましたが以上となります。

<渡辺委員長>

はい。ありがとうございます。それではここまでのところで、質疑応答に移りたいと思いますが、どなたかご質問はございますでしょうか。

<工藤委員>

「1-A-3」の成果の部分についてですが、60席の専用席に対してほぼ満席とのことでしたが、具体的に何席ほど埋まったのでしょうか。

<村田館長>

はい。その他に介助者席等も用意しており、そちらはすべては埋まらなかったのですが、専用席60席のうち、おかげさまで58席のご利用をいただきました。

<工藤委員>

追加で質問ですが、数値としては58名の申し込みがあつて、当日キャンセル等もなく58名全員が来場されたということでしょうか。

<村田館長>

その通りです。

<工藤委員>

わかりました。ありがとうございます。

<渡辺委員長>

他にはいかがでしょうか。よろしければ、先に進ませていただきたいと思います。

それでは、こども未来創造館および子育てサロン事業についてご説明いたします。

<村田館長>

「2-A-2」、科学事業の評価点数に関わる取り組みです。体験事業のより一層の強化を目指し、

サイエンスウィークを開催いたしました。期間は令和6年8月3日から9日までの1週間にわたる連続イベントです。13種類のワークショップを設定し、夏休みの自由研究のテーマとして真剣に参加する子どもたちの様子も伺いましたが、このイベントでは学校で学ぶ実験とは少し違う角度で、科学を体験できる工夫をしております。

例えば、ロボット操縦体験やゲーム制作、サイエンスショーなど、子どもたちの興味を引くような要素をふんだんに取り入れたプログラムを企画しました。楽しみながら科学への興味を持てる1週間になったと考えております。参加人数は総勢で2,400名もの子どもたちにご参加いただきました。

特にロボット操縦体験では、トーナメント方式での開催をしておりますので、応援する保護者の皆様も非常に熱くなって盛り上がるシーンが見られました。

続きまして「2-A-3」、スポーツチャレンジパークスペシャルの取り組みについてです。ギャラクシティでは、運動系の体験事業を日頃から盛んに行っております。

目的は、運動神経の発達や身体能力の向上に繋げることはもちろん、スポーツの生涯経験を積むことで、競技を通じて生まれるチーム力や自己肯定感を育むことを屋内スポーツとして体験する事業と認識しております。先ほど申し上げたサイエンスウィークのロボット大会と同様に、競うという要素も大切にしています。もちろん、競うだけでなく、楽しみながら基礎体力を高めることも大きな要素です。

種目としては、モルック、カーレット、ボッチ

ャといった、各種体験スポーツを設定しました。通常、隔週で定期的に開催しているスポーツチャレンジパークのスペシャル版として、ゴールデンウィークに開催しております。

このイベントは、障がいのある方も参加できますし、小さなお子様から大人まで、それぞれの興味を惹きつける内容となっています。あえて既存のルールを崩しながら、年齢や体力による得点差が出すぎないように配慮し、誰もが楽しめるオリジナルルールで開催いたしました。家族同士で対戦する競技もあり、利用者間の交流の場としても非常に良い機会になったと感じております。

昨今、屋外や公園で運動する機会が減少しているという社会背景もあります。天候に左右されないギャラクシティで、こうした運動系のイベントを実施することは、非常に価値が高い事業であると考えております。

続いて「2-A-4」、子育てサロンが主催する、館内全体を使った大型イベントちびっこクリスマスフェス開催についてです。

このイベントは、未就学児とその保護者を対象としたギャラクシティ最大級の大型イベントです。アンケートなどを見ますと、ギャラクシティは未就学児から小学校低学年まで幅広くご利用いただいておりますが、未就学児親子に特化したこれほどの規模のイベントはなかなかございませんでした。

当日は、普段使っていただいている子育てサロンの部屋を飛び出し、館内全体を使って各所で様々なワークショップを開催いたしました。特に赤ちゃんハイハイレースは、見学者も含め非常に大人気でした。

実績としましては、12月中の最高となる6,836名を記録しました。

また、このイベント以降に顕著になった現象として、お父様（パパ）の来館者が増加したことが挙げられます。前年度もお話したかと思いますが、昨年度はパパの来館者数が前年を超え、12,049名を記録いたしました。令和5年度はパパの来館者数が10,845名です。

こうした取り組みを継続することで、お父様方への認知向上や、子育てサロン以外の場所、あるいはイベントそのものの認知拡大に繋がったと考えております。多くの未就学児や保護者の方々に来ていただきましたが、今後も小学生・中学生と、世代が変わっても長くギャラクシティを利用していただけるよう、事業を拡大、継続していきたいと考えております。

加算提案の1から4については以上です。

<渡辺委員長>

ありがとうございます。では、ここまでの内容で質疑応答に移ります。どなたかご質問はございますか。

<工藤委員>

「2-A-4」の子育てサロンについてお伺いします。1日の来館者が6,800名を超え、夏休みの平均来館者数も上回っているというデータが提示されていますが、普段の冬休みの土日は、平均して何名ほど来館されるのでしょうか。

<村田館長>

12月の通常の土日ですと、大体4,000名から5,000名ほどです。もちろん6,000名を超える日もありますが、平均すると5,000名程度です。

<工藤委員>

そうすると、このイベントによって1,500名から1,800名ほど集客がこの事業で上積みされたということですね。承知いたしました。ありがとうございます。

<渡辺委員長>

他にいかがでしょうか。私から1点、お父様方の参加が非常に増えているというお話でしたが、お父様方も子育て相談などを利用されるのでしょうか。

<子育てサロン担当>

お父様方からのご相談は、かしこまった形ではなく、日常会話の中での気軽な相談が多いです。例えば、お子様への接し方についてどうしたらいいですかと聞かれたり、工作イベントを通じてこんな作り方があるんですねと、遊びの広げ方にスイッチが入るような場面が見受けられます。深い相談というよりは、遊びを通じたコミュニケーションの中でヒントを持ち帰っていただくような形です。また、夫婦間での子育て方針の違いについて、それとなくお話しされる方もいらっしゃいます。

<渡辺委員長>

はい、ありがとうございます。

<伊志嶺委員>

もう一点確認ですが、サイエンスウィークのロボットコンテストについてです。以前も同様の企画があったかと思いますが、以前と比較して、新しく取り組んだ点や変更した点はどこでしょうか。

<手塚副館長>

2年前にも類似のコンテストを行ったことはございます。令和6年度の新しい点としては、より規模を拡大したことです。事前公募でメン

バーを集中して募り、参加人数を大幅に増やした上で開催いたしました。その分、入賞特典なども充実させ、より盛り上がり大きくなったという点が昨年度の大きな特徴です。

<伊志嶺委員>

規模自体が大きくなった点が大きな変更点ということでしょうか？

<手塚副館長>

その通りです。

<村田館長>

それでは、まるちたいけんドームの進化について、「2-A-5」に基づきご説明します。

当ドームでは通常、天体解説や投影番組をお届けしておりますが、それ以外の新たな取り組みにチャレンジいたしました。まず VR 体験についてですが、ソニーミュージックエンタテインメント様と提携し、メタバースの世界、つまり最新の DX テクノロジーを地域の方々に体験していただきたいと考え、企画しました。

ドームスクリーンに 5 名のタレントがアバターとして登場し、歌やダンスを披露しました。来館者とのコールアンドレスポンスも行われ、まるで本物のライブ会場にいるかのようなリアルなステージングは、通常のプラネタリウム番組と全く遜色のない素晴らしいプログラムでした。本公演は仙台のプラネタリウムでも同時開催されましたが、ギャラクシティが初演となり、170 席のチケットは早期に完売しました。

若いクリエイターたちの想像力を世に送り出したいというソニー様の思いと、最新テクノロジーを地域の方に届けたいという我々の思いが合致し、実現に至りました。当日はソニーの

副社長も視察に来られるほど、各方面から注目されておりました。まるちたいけんドーム投影の無限の可能性を感じた事業でございます。その後も交流が続いており、第 2 回目となる全国ツアーの際も、ギャラクシティを会場として選んでいただきました。さらに令和 8 年 2 月にも、VR を活用した新たな企画を予定しております。

続いて、バイリンガル解説についてです。現在、ウクライナから避難されている方を、JAXA（宇宙航空研究開発機構）様からのご紹介を通じて解説員として採用しております。彼女の努力もあり、今では通訳を介さず日本語で解説ができるまでになりました。これにより、これまで来館されなかったウクライナの方々からリピーターとして来場されたり、日本の方もウクライナの星空や文化を体験することで、国は違っても宇宙や星空は一つに繋がっているという一体感を感じていただいております。彼女は現在、全国のプラネタリウムを回るなど、著名な解説員として活躍しています。

これを機に、バイリンガルの解説をもっと増やしていけたら面白いと考えております。英語はもちろん、最近では中国の方も増えています。実は当館には、アメリカ人や台湾人のスタッフも在籍しております。職員が直接解説するだけでなく、外部からも募集するなどして、多言語に対応したプラネタリウム体験を広げていきたいと考えております。

続いて、「2-A-8」のこらぼシティについてです。新規の取り組みとなります。

テーマは未来の地域自治を考えるです。子どもたちが主役となり、大人たちと対話を繰り返しながら、共に一つのプログラムを作り上げてい

くプロジェクトです。本番は9月に開催しましたが、5月頃から足立区内の全エリアより賛同者を募り、まずは40名でスタートいたしました。

中央本町地区、舎人地区、鹿浜地区、千住地区などを中心に、各地域にすでにあるコミュニティの方々ギャラクシティに集まりました。そしてギャラクシティを一つの仮想の街である、こらぼシティに見立てて、まちづくりワークショップを行うという趣旨のイベントです。西新井文化ホールやまるちたいけんどームなど、館内全域を使用した大規模な開催となりました。

参加者の内訳は、図書館、社会福祉協議会、企業、病院、商店、足立区浴場組合など、多岐にわたる業種の方々です。これらの方々と、足立区全域から集まった子どもたちが月1回のこらぼシティミーティングを実施し、自分たちがやりたい催しをエリアごとに決めていきました。

中でも人気だったのが、お仕事体験コーナーです。当日はまず役所で受付をして市民になることから始まり、ハローワークで仕事を見つけ、実際に働く体験ができるワークショップです。仕事が終わればまた次の仕事を探して登録するというサイクルを繰り返し、子どもたちは夢中でワークを行っていました。

実績数値としましては、イベント参加者数が7,384名、1日の総入場者数は11,678名を数えました。これは土曜日の入場者数として過去最高値を記録しております。

この事業を通じて地域コミュニティ同士が繋がり、子どもから大人まで世代を超えた深い絆が構築できました。また、ギャラクシティを飛

び出した広がりについてもご質問をいただいておりますが、例えば病院関係者の参加をきっかけに、図書館員が病院へ出向いて朗読お話をを行うといった連携が生まれています。

さらに、イベント内で使用した仮想通貨「コラボ」についても、各地区で独自に行われているお仕事体験イベント（キッズタウン等）の通貨を全ての地区で使えるような仕組みを整えています。ちなみに、ギャラクシティでは、仮想通貨「コラボ」をギャラクシティ仮想通貨「ギャラク」に両替して使えるようにしています。実際に地域学習センターなどで、この通貨を使ったり、預金や消費ができるような流れを全地区へ広げていく、非常に良い機会になったと考えております。

加点提案の5から9については以上です。

<山縣副委員長>

VR体験についてですが、多額の経費がかかっているとのことでした。これは指定管理者側から出したものなののでしょうか。

<村田館長>

いえ、これはソニーミュージックエンタテインメント様側で、プラネタリウムでのVR活用という新しい試みに対する先行投資として負担されたものです。

<山縣副委員長>

もしこれを今後、定期的に自前で企画しようとしたら、やはりそれだけのコストがかかってしまうわけですね。ソニー様の協力がないと実施は難しいということでしょうか。

<村田館長>

相場は分かりませんが、同様のクオリティを外

注すれば相当な費用がかかるのは事実です。

<まるちたいけんドーム担当>

今回のイベントはあくまで企業との連携におけるテストケースとして捉えています。ドームの活用方法がどれだけ広がるかを確認するための試みでした。VR の活用には様々な方向性があります。例えば、メタバース空間内に仮想博物館を作り、その中で展示物の説明をしたり、あるいはプラネタリウムそのものを仮想空間として構築して、遠隔地の解説員と話をしたりといったことも可能です。今回の事例は、他の施設と繋いだ際にどのようなことが可能かを探るための、一つの実証実験であったとご理解ください。

そのため、同じエンタメ企画をずっと続けることは考えていません。

<山縣副委員長>

ただ、これをきっかけに企画を考えられたらいいと思います。

<まるちたいけんドーム担当>

大規模改修で休館する3年の間、ギャラクシィをVR空間として残し、利用者に忘れないでいてもらうといった使い方も、技術的には可能だとは感じました。

<村田館長>

また、2年間の期間延長が決まった際の加点提案でも触れましたが、エンタメだけでなく教育的な活用も可能です。まるちたいけんドームの全天周を使って、豪雨や洪水といった災害時を想定したリアリティのあるVR映像を体験してもらうなど、活用の可能性は非常に広がっています。星空解説に力を入れるのはもちろんですが、こうした新しいテクノロジーを子どもたち

に体験してもらう機会を、今後も広げていきたいと考えています。

<四宮委員>

コラボシティについて伺います。地域の自治と一緒に考える大人と子どもを40名募集したとのことですが、その内訳、大人と子どもの比率はどのような感じでしょうか。

<村田館長>

もともと各地区で活動されている地域コミュニティの方々にご参加いただいたのですが、比率としては7:3の割合で子どもが圧倒的に多かったです。大人が子どもについてくる、あるいは子どもが大人を引っ張ってくるような形で、計5地区から総勢40名ほどが集まりました。既存のコミュニティが行っているワークショップをここで披露していただきました。

<四宮委員>

我々の団体も、今後どのように地域自治体と関わっていくかを模索しているところです。ちなみに、VRを使った防災シミュレーションというのは、具体的にどのような形で実施するのでしょうか。

<手塚副館長>

防災シミュレーションにつきましては、VRゴーグルを使用することで災害時の体験ができるものとなっております。VR体験車が1台しかなく、体験できる人数が限られていたのですが、一度に20名ほどが体験できるようになっております。具体的には、専用の座席に座っていただき、映像に合わせて座席が動いたり、イヤホンを装着して音響を加えたりすることで、実際の災害時の様子を極めてリアルに体験できる装置です。

<渡辺委員長>

ありがとうございます。他にご質問はございませんでしょうか。なければ次へ進みます。では、西新井文化ホール事業の説明をお願いいたします。

<村田館長>

はい。加算提案「2-B-1」、シアター1010 開館20周年×ギャラクシティ創立30周年の合同企画についてご説明します。

先ほど申し上げた通り、昨年度はギャラクシティが30周年、同時に北千住駅前のシアター1010が20周年を迎えました。もともと両施設は文化交流を行ってきましたが、この節目を祝うため、共通のテーマを設けてコラボレーション企画を立ち上げました。

北千住、西新井という街のイメージから、アメリカンルーツミュージックであるリズム&ブルース、ゴスペル、ジャズといった音楽が合うのではないかと考え、酒場の空気感を取り入れたコンサートや、楽器の演奏体験などを企画しました。

メインイベントとして、シアター1010では上田正樹さんのリズム&ブルースコンサートを開催し、ギャラクシティでは綾戸智恵さんのジャズコンサートを開催しました。日程をずらして開催したこともあり、おかげさまで両日も完売となりました。

協力体制については、まずビジュアルや広報のテーマを統一しました。広報面では両施設の公演情報を読売新聞などの大手メディアに出し、事前プロモーションとして北千住マルイ前の人通りが多い場所でストリートピアノ等のイベントも実施しました。さらに、お互いの施設

でワークショップを相互に開催し、集客の拡大を図りました。

公演当日は、それぞれの職員が行き来して運営をサポートし合うなど、密接に連携しました。その効果として、足立区を代表する2つの文化ホールの事業を一体として楽しんでいただくことができ、アンケートでも両方のイベントに参加したという方が多く見受けられました。

これまでもシアター1010とは連携してまいりましたが、今回の周年事業を通じてより一層絆が深まりました。今後も足立区の文化振興のために、より深く連携していけるものと考えております。

続きまして「2-B-2」、地域アーティストとのコラボレーション事業についてです。西新井文化ホールの事業には、プロを招く「エンターテインメント型」事業と、地域の方々を主役とする「区民応援型」事業の2本の柱がありますが、こちらは「区民応援型」の事業展開となります。

大きく2つのイベントを開催いたしました。1つはあだちアートリンクカフェ、もう1つはミュージック・ハーモニーです。

アートリンクカフェは、区内在住の音楽家や美術家など、ジャンルを問わず様々なアーティストが集うコミュニティです。3年前に活動が途切れてしまっていたものを、今回改めて以前のメンバーをベースに、ジャンルを超えたコラボレーションとして一、二部制のイベントとして再編・開催しました。出演者は全員、足立区在住のアーティストです。

ミュージック・ハーモニーでは、我々が年間を通してサポートしている支援団体の6団体が

一堂に会する、これまでにない合同コンサートを開催しました。それぞれの団体には個別の定期公演がありますが、その枠を超えて全団体が協力し合う形です。

いずれのイベントも、準備期間をたっぷりと確保し、毎月1回の定例会を重ねました。内容の協議を繰り返し、互いに一緒に何ができるかを模索しながら進めてまいりました。これまではギャラクシティと歓喜の演様、ギャラクシティと足立シティオーケストラ様といった、ギャラクシティを介した1対1の定期公演でのお付き合いが中心でした。しかし、今回の定例会やイベントを通じて、団体同士の横の繋がりができたことが非常に大きなポイントです。

アーティストや団体がジャンルの垣根を越えて交流できたことは、皆様からも非常に喜ばれました。こうしたアーティスト同士の才能が混ざり合うことで、新しい価値観や活動が生まれています。例えば、音楽経験のあるギャラクシティの職員とブリランテのソプラノ歌手が連携してストリートピアノイベントに出演したり、足立シティオーケストラの方と合唱連盟の方が別の場所で共に活動を始めたりといった広がりが見られます。

こうした方々には、これから文化活動を始める子どもたちの支援や、区の文化芸術振興の推進役も担っていただきたいと考えております。私たちが参考にしているミュージックブリッジのような取り組みを目指し、ギャラクシティを単なる施設ではなく、地域コミュニティのプラットフォームへと進化させていきます。団体同士の横断的な繋がりを大切にし、それを子どもたちへ還元できるような活動を、今後も拡大、継続してまいります。それだけではなく、一緒に演奏する仲間を増や

していくという意味で、先ほどの地域アーティストのプラットフォーム化にも繋がる活動を続けてまいります。

続いて、加点提案「2-B-3」、TV放映50周年記念「宇宙戦艦ヤマト」交響組曲公演についてです。

昨年が50周年という節目でした。宇宙戦艦ヤマトには熱狂的なファンが多くいらっしゃいますが、当館のスタッフにも50周年を機に、今までにない事業をやりたいという熱い思いを持つ者がおり、交響組曲の公演を企画いたしました。

しかし、企画したものの、最大の問題は、譜面がどこにも現存しないということでした。ご存じの通り、作曲家の宮川泰先生はすでにご逝去されています。そこで、ご子息であり「マツケンサンバII」の作曲でも有名な宮川彬良先生のもとを何度も訪ねました。どうしてもこの企画を実現したい、譜面はないでしょうかと相談に通り詰めました。

また、各所が保持する著作権などの高いハードルもありましたが、それらを一つひとつ乗り越え、最終的には一部残っていた資料をもとに、今回演奏を担当していただいたオーケストラぴとれ座の皆様の多大な協力により、譜面を現代に再現することができました。

権利関係が非常に厳しい世界ではありますが、宇宙戦艦ヤマトというタイトルを掲げて公演を行う許可をいただけたことは、ファンにとっても非常に大きなインパクトとなりました。当時の主題歌や交響組曲をフル編成のオーケストラでお送りするという企画を、なんとか形にすることができたのです。

チケットは即完売し、全国から熱心なファンが駆けつけてくださいました。当日は宮川彬良先生にもご登壇いただいたほか、ヒロインの森雪役の声優である麻上洋子様もプライベートでご来場されており、会場は大いに盛り上がりました。たまたま横に座っていたギャラクシティ職員とも交流してくださり、大変喜んでいただけたと聞いております。

数々の難局を乗り越えての開催でしたが、ご来場いただいた皆様の喜びの表情を見て、挑戦して本当によかったと実感いたしました。また、今回の譜面復元による公演は初演となります。舞台上で宮川彬良先生からも、若い方々にヤマトの音楽を託していきたいため、ぜひ今後も再演してくださいという温かいお言葉をいただき、大盛況のうちに終了しました。

評価シートにも書かせていただきましたが、ハードルの高い企画であっても、情熱を持ってぶつかれば実現できるのだと確信しました。既存のパッケージ化された事業だけでなく、こうしたオリジナリティのある文化事業を、今後もチャレンジして増やしていきたいと考えております。

西新井文化ホールの加点提案に関する説明は以上です。

<渡辺委員長>

ありがとうございます。ご質問はございますでしょうか。

<伊志嶺委員>

地域アーティストのコラボレーション事業についてですが、文化ホールが地域のアーティストを繋ぎ、今で言う文化的コモンズを作り上げ

ていくという機能は、今の公立施設にまさに求められている役割ですので、非常に良い取り組みだと感じました。質問ですが、ミュージックハーモニーについては、各地域の団体が集まって企画、制作から共に行ったのでしょうか。

<村田館長>

はい。各団体の代表の方に集まっていただき、内容をゼロから揉んで作り上げました。

<工藤委員>

私もエンターテインメント系の仕事に関わっておりますので、個人の強い思いから企画を立ち上げ、形にすることの大変さはよく理解しています。その意味で宇宙戦艦ヤマトの企画を実現させたのは素晴らしいですね。

一点確認ですが、加点提案書にある7月の完売について伺います。これはこらぼシティの一環として子どもたちが参加した公演を指しているのでしょうか。また、観客は関係者中心でこれほどの人数が集まったというイメージでしょうか。

<村田館長>

こちらは、足立区で活動している団体、ほしかぜによる公演です。子どもたちの表現力を高めるために、演劇を中心とした活動をしている集団で、2年に1回ギャラクシティで公演を行っています。ちょうどこらぼシティの時期が、その2年に1回の公演時期と重なったため、連携して実施いたしました。演出家は大人が務めますが、内容は極力子どもたちのやりたいことを取り入れ、子ども自身に考えさせる演出方式をとっています。

実績として835名のご来場で満席となりましたが、こちらは有料ではなく、無料招待公演として実施したものです。毎回、子どもたちの感

性が非常に高く、私も拝見しておりますが、隣で観ていた方もそのレベルの高さに驚かされていました。ストーリーが大人でも深く考えさせられるような場面もあり、まるでプロの劇団のような表現力を持つ子どもたちの集団です。

<工藤委員>

なるほど。そうすると、資料にある完売という表現は、無料公演において入場者が満員になった満席という意味で扱っているということでしょうか。

<村田館長>

おっしゃる通りです。実際には満席という扱いですが、資料上はそのように記載させていただいております。

<工藤委員>

わかりました。ありがとうございます。

<渡辺委員長>

他にいかがでしょうか。

<山縣副委員長>

1点気になったのですが、今回はプラネタリウムの通常投影など、日常的な事業についてのお話がありませんでした。これらについては、これまでと特段変わりなく、来館者数も例年通りに推移しているという理解でよろしいでしょうか。

<まるちたいけんドーム担当>

はい、通常投影について補足させていただきます。令和6年度は、すみっこぐらしの番組をプラネタリウムで放映したのですが、これが我々の想定を遥かに超える反響がありました。非常に多くの方にご来場いただき、問い合わせも多くいただきました。

夏場はキャラクターや恐竜番組を放映し、これを目当てに列ができるほどで、皆様に楽しんでいただくことができました。秋から冬にかけては少し落ち着き、宇宙について深く考えていただけのような、本来の学習投影らしい落ち着いた雰囲気とするなど、切り分けを行いました。

<山縣副委員長>

動員数などに大きな変化はなかったのでしょうか。

<まるちたいけんドーム担当>

いえ、令和6年度はやや増加しました。

<村田館長>

通常、年間の来館者数は8月がピークになるのですが、まるちたいけんドームに関しては、7月の動員数が8月を超えました。これは先ほど申し上げた番組の影響が非常に大きく、本来の夏休みピークを前倒しする形となりました。8月はファミリー層が中心ですが、7月はすみっこぐらしの番組を目当てとした、普段はあまり来館されないコアなファン層の方々にもたくさん足を運んでいただきました。

<渡辺委員長>

はい、ありがとうございます。他の方々はいかがでしょうか。今回ご紹介いただいた加算提案の内容以外でも、せっかくの機会ですのでご質問があればお願いいたします。

<伊志嶺委員>

今のお話の中で、公演について西新井文化ホールとしても、オリジナリティが重要だというお考えが出ましたが、これまでオリジナルの主催公演はどの程度実施されてきたのでしょうか。提示された資料を拝見していると、これまでは

買い取り公演が多いという印象を持っていたのですが、一から作り上げるような公演について、これまでの取り組みを教えてください。

<村田館長>

はい。意識としては常にオリジナルを心がけております。特に「うちでしかできない」という点にこだわっている事例がいくつかございます。例えば、毎年秋に行っているイリュージョンマジックショーがあります。これは単なる有料公演ではなく、事前にワークショップを行い、参加した子どもたちをゲストのタレントと一緒にステージに立ってもらおうというものです。よくある発表会形式ではなく、チケット代をいただくプロの興行の一部として、子どもたちをプロのタレントと同じ扱いで出演させています。

過去には、アイドルグループと一緒に踊ることや、小林幸子さんと一緒に共演したり、元宝塚歌劇団の姿月あさとさんと共演したりといった企画も、完全に弊社のオリジナルとして制作しました。これらはアーティスト側の深い理解と協力があって初めて実現できるものです。また、以前提案時にも映像でお見せしましたが、ミュージカルのアルプスの少女ハイジでも同様の取り組みを行いました。わずか3日間という短期間のワークショップでしたが、当日出演した子どもたちは、一般のお客様がプロの子役と見間違えるほど、のびのびとした高い完成度を見せてくれました。こうしたエンターテインメントを掛け合わせたような事業が、我々の強みであると考えております。

<渡辺委員長>

ありがとうございます。それでは、全体を振り返って何かご質問はございますか。

<酒井委員>

今日のお話やアンケート結果を伺っていて思うのは、やはりギャラクシティにおいてプラネタリウムの存在は非常に大きいということです。このプラネタリウムの利用については、まだまだ利用者を増やせる余地があると感じています。魅力的なコンテンツを増やしていくことはもちろんですが、運営側としても、より一層利用を促すという意識を持って取り組んでいただきたい。

その一環として改善をお願いしたいのがホームページです。私が何月何日の何時にプラネタリウム観ようと思ってサイトを見た際、パッと情報に到達できませんでした。個別の企画が、いつからいつまで開催中という情報は出ているのですが、カレンダー形式などで「その日に何時何分から何をやっているか」が直感的にわからないのです。見たいと思った瞬間に情報がわからないのは機会損失ですので、ぜひ改善をお願いします。

あと、アンケート結果の2枚目にある来館目的についてです。「文化芸術鑑賞」、「遊び・運動」、「ものづくり・ワークショップ」など様々な項目がありますが、「科学」という回答が非常に少ないのが気になります。ギャラクシティは科学が中心的な役割を担うべきですし、それだけの機材も整っているはずですが。この来館目的における「科学」の少なさは、今後の課題ではないかと感じています。集客の面で、子どもたちが集まりやすく、再訪しやすい工夫はされていると思いますが、ぜひ科学を体験したいという意識を持って来館してもらえるような施設運営を目指していただきたいです。期待しています。

<手塚副館長>

貴重なご指摘ありがとうございます。まず先ほ

どのホームページの件ですが、期間ごとの一覧表などは掲載しているものの、確かに目的の情報に到達しづらい構造になっております。この点は早急に改善いたします。

また科学事業についても、来週火曜日には科学工作教室を行ったり、夏休みにはサイエンスウィークとして各種ワークショップを開催したりと注力はしております。しかし、おっしゃる通り、科学が目的というお客様がまだ少ないのが現状です。来年度はさらにそこを強化し、押し出していきたいと考えております。

<渡辺委員長>

他にいかがでしょうか。私から一点、来館者数について伺います。昨年度とほぼ同数とのことですが、その理由についてはどのようにお考えでしょうか。

<村田館長>

実績として、前年比で50名程度の微増に留まりました。要因はいくつかあると考えております。一つは、コロナ禍が明けて、対面での体験への需要が一気に高まったのが令和5年度でした。オンラインではなく、実際に行って体験したいという層が多くお越しになり、令和6年度はその需要が一旦落ち着いたような時期だったのではないかと感じております。

アンケートでは内容に対して高い満足度をいただいておりますが、一方で、いつも同じ時期に同じことをやっているという、マンネリ化を感じさせてしまっている部分もあるかもしれません。我々としても、現状をピークだとは思いたくありません。新しいことに常にチャレンジし続ける必要があると考えております。

かつては年間151万人もの来館者があった時代もございました。急にそこまで戻すのは容易ではありませんが、まずは135万人を目指し、

指定管理の最終年度に向けて着実に数字を伸ばしていきたいと考えております。

<渡辺委員長>

ありがとうございます。新しい新規事業や魅力的なコンサートなども実施されているのに、数字が横ばいだったのはなぜだろうと気になっておりましたが、事情は理解いたしました。

<酒井委員>

来館者数がなかなか増えていないという点についてですが、これもアンケート2枚目の下にある、利用頻度のデータに理由が表れているのではないのでしょうか。

週に3、4回利用する方から1年に1回程度利用する方まで、いわゆるリピーターが計600名近くにのぼるのに対し、初めて利用する方は240名に留まっています。つまり2:1以上の割合で、再訪者が占めているわけです。

そうなると、もし企画がマンネリ化しているのであれば、来館者数は増えないのが当然という結果になります。数字を伸ばすには、この初めて利用する方を増やすしかありません。そして、新規層を増やすために何が必要かといえば、やはり広報だと思います。現状、広報力に欠けている部分があるのではないのでしょうか。

せっかく様々な取り組みを広報しているにもかかわらず、初めて利用する方が全体の3分の1割程度しかいないというのは、改善の余地があると感じます。ここを改善しない限り、全体の来館者数を底上げしていくのは難しいのではないのでしょうか。

<山縣副委員長>

スタッフの感覚として、1日あたり何人ぐらい来館者がいると、混んでいると感じるのでしょうか。

<村田館長>

1日のトータルで6,000名を超えると、かなりの混雑を感じます。平日は通常2,000名から3,000名程度ですが、団体予約が入ると3,000名を超えることもあります。月曜日が振替休日などの場合は、土日と同様に5,000名から6,000名、非常に多いときには1万名に達することもあります。ただ、1万名を超えると施設内の制御が難しくなるため、そこまで達するのは年に4、5日程度です。

<山縣副委員長>まるちたいけんドームの定員は170名でしたよね。気になったのが、「2-A-9」にある、星とピアノの参加人数です。1回あたり60名から70名とのことですが、これだとまだ空席がある状態ですよ。夜の時間帯は大人の集客という課題があるかと思いますが、認知度はどうなのでしょう。

<村田館長>

はい。ギャラクシティは子どもの施設というイメージが強く、大人の方にはまだハードルが高いようです。ただ、星とピアノを始めてからは、徐々に人数も増えております。平均すると60～70名ですが、人気のYouTuberピアニストを招いた際などは100名を超えました。

<山縣副委員長>

かつて渋谷の五島プラネタリウムなどで金曜夜の類似企画が人気だった例もありますが、現在は第3金曜日の月1回開催ですが、毎週開催にするなど、定例化を進めればもっと評判になるのではないのでしょうか。

<まるちたいけんドーム担当>

現在、星とピアノは第3金曜日に開催しています。100名来れば多い感覚です。ギャラクシティは子どもの施設というイメージが強いため、

なかなか大人が来てくれません。音楽の好きな人にプラネタリウムを知ってもらうことが目的で始めました。このイベントで観客の掘り起こしを行っています。現在は認知されてきていますが、令和6年度の段階ではあまり認知されていませんでした。

<広報担当>

星とピアノを始めた当初は、参加者がわずか2、3人ということもありました。そこから試行錯誤し、金曜夜の定例開催を周知することで、ようやく安定して50名と集まるようになってきました。西新井は渋谷と違い、夜6時を過ぎると駅前の明かりが消え、人通りが激減します。そこで、大手町で働く区民が、早く帰宅した際に地元でプラネタリウムを見たいというライフスタイルを提案しようと、新聞社に企画を持ち込んだりもしました。

また、来館者数130万人の維持についても議論しています。開館当初の151万人という数字は、コロナ禍前の密集の状態が許された時代の数字です。現在は換気や収容人数の制限、実施回数の調整などを行っており、今の収容人数ベースで計算すると、実質的なフル稼働に近いのが130万人という数字です。

土日の需要はすでに限界に近く、平日昼と平日の夜の需要を考える必要があります。つまり、全体の数字を伸ばすには需要構造を変える必要があります。そのため、これまでは「点」だったイベントを繋いで「線」にし、毎月何らかのイベントを開催することで、集客を1割以上底上げしたいと考えています。

地域の団体を呼び水に、これまでギャラクシティに来なかった層を呼び込みます。最後の1年のため、以前と同じ方式ではなく、今のお客様

のライフスタイルを見極めたアプローチで150万人を目指したい、というのが内部での議論の結論です。

<渡辺委員長>

詳しいご説明をありがとうございました。それではお時間になりましたので、本日のヒアリングはここで終了とさせていただきます。指定管理者の方はここでご退席をお願いします。

<村田館長>

ありがとうございました。

【指定管理者退場】

【意見交換】

<渡辺委員長>

皆様、ありがとうございました。以上で、本日の予定を終了いたします。事務局に司会をお返しいたします。

<小栗係長>

皆様、本日は長時間にわたり、忌憚のないご意見をいただきましてありがとうございました。本日のヒアリングにつきましては、西新井文化ホール事業まで予定通り終了いたしました。次回は明日、24日の午後1時からとなります。アンケート結果の確認から進めさせていただき、得点を付ける作業をメイン進めさせていただきたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

閉会のご挨拶を山縣副委員長、よろしくお願いいたします。

<山縣副委員長>

はい。以上をもちまして、足立区ギャラクシテ

ィ第1回運営評価委員会を閉会いたします。どうもご苦労様でした。

<委員一同>

ありがとうございました。

【1日目終了】